

令和2年4月16日
クローバーこども園園長

本園のめざす教育・保育について

1. 一人ひとりがかがやく人生を

本園では、「未来を切り拓ける子どもを育てる」ことを基本理念として、「豊かな成長と確かなひとり立ち」を目指し、一人ひとりの子どもに寄り添い、心とからだの育ちを大切に、教育・保育を進めていきたいと考えています。

就学前の子どもたちにとってこの時期は、一人の人間として成長し、小学校入学後だけでなくその後の学生生活や人生をよりよく生きるための基礎を築く重要な時期です。人格形成のための時期なのです。

スマホが普及し、AIの進化が進むなど、世界的な技術革新等により、私たちの社会や生活も大きく変化していくことが予想され、どのような未来が待っているのか想像もつきません。そのような中で子どもたちの未来を大人が指し示すことはできません。子どもたちは自分たちで未来を切り拓いていかないとはいけないのです。

子どもたちの成長、広い意味での教育は、特にこの時期の教育は生活の中にあります。教育の本来の、というか広い意味での目的は将来の社会を担う人を育てることです。停滞した社会のなかでは、親と同じような人を作り出せば社会は繋がっていきます。以前はそれでよかったのです。近代から現代への歴史の中で、以前よりは速い速度で社会は変わってきたと思います。私も半世紀以上生きてきましたが、子どもの頃は父親が家事をするなどというのは考えられませんでした。男は外で働いて女は家庭を守る、というのが常識でした。これはもう常識ではありません。

今後の社会は、今の社会とは加速度的に変化が早くなり、現在とは全く異なるものになりそうです。AIの発達・進化などにより今の仕事の半分は20年後になくなると言われていましたが、最近聞いた話ではそれが10年後になるとの話も出ています。医者や弁護士の仕事もAIがこなすという話も聞きました。なるほど、膨大な知識と経験を要する仕事でもAIに覚えこませれば、世界一の医者や弁護士が沢山作れるのかもしれませんが、自動運転や無人レジ、10年後にどのような世界が待っているのでしょうか。皆さんもそうかもしれませんが、子どもたちはもっと不透明な時代を生きていかなければならないのです。

そんな世界を想像したときに、子どもたちにどのような能力が必要なのでしょう。

決められたことをきちっとできる能力、言われたことをこなす能力、それもまた以前は必要だったのです。それが高度成長を支えました。しかし、今後の世界はそ

れだけでは生きていけません。AI にはない、想像力や感性、考える力を磨いてい
かないと生き抜いていけないのではないのでしょうか。

2. 勉強ができる子に？

本園での教育・保育にどのようなことを求められますか？どんな子どもに育ててほし
いのでしょうか？

小学校にスムーズに上がれるように？ 学校での成績がよくなるように？ 良い就職先
が見つかるように？ お金持ちになれるように？

どれも、望ましいですね。

でも、私たちが願うのは、「生きる力」があつて、幸福に生活している子どもたちです。
例えば、好きなことが仕事になる、仕事にやりがいがある、生きがいになる趣味がある、
日々の生活が楽しい、などです。

受験がありますね。子どもたちにとって大変な試練です。社会の中に、入学試験、就
職試験があります。一定の評価の指標として学力は必要です。社会にこういうものがあ
る限り、勉強は必要です。でもこれは手段であつて、目的ではありません。

大学や会社でも学生のいろいろな能力を評価して選考しようという例も見られます。
でも未だ筆記試験が重要視されます。

皆さんは社会人として働いておられますが、社会(会社)の中ではどのような人が評
価されるのでしょうか。いわゆる「ものの役に立つひと」ではないのでしょうか。会社はそう
いう人を探します。入社を選考時にそれを見抜くのはかなり難しいものです。そこでど
うしても、評価の基礎として学歴や学力を重視します。受験という一つの試練を潜り抜
ければ役に立つ可能性も高いだろうということです。やはり大企業に就職するためには
受験というものも否定できないでしょう。そういう意味で受験は手段なのです。

3. 「認知的スキル」と「非認知的スキル」

最近の教育の話題の中でよく出てくることばで、「認知的スキル」と「非認知的スキル」
というのがあります。

知識の量や計算の速さや問題を解く速さといったいわゆる頭の良さは「認知的スキ
ル」と呼ばれます。代表的なのがIQ(知能指数)ですね。

一方で、「非認知的スキル」はそれ以外の能力ということで定義は難しく、測定も難し
いのですが、自立心、自己肯定感、社交性、協調性、忍耐力などです。近年の研究で
も、「非認知的スキル」がその後の学力や経済状態、社会的地位に影響を及ぼすこと
が明らかになってきています。「非認知的スキル」が学力などの「認知的スキル」も向上

させることはわかっていますが、逆に「認知的スキル」が「非認知的スキル」を向上させることはないと言われていました。そうですね、勉強ができるからと言って、社交性があったり、協調性があるとは限らないですよ。

でも、「非認知的スキル」があって、自信をもって物事に取り組み、忍耐力があって失敗しても気を取り直して挑戦していく、そんな人物像であれば学力も向上するし、受験も突破していくことができます。そして社会に出て行っても役に立つ人になれるのです。

これまでは、与えられた課題に対処できるようにする教育が主流でした。今は課題自体が日々変化し、変化した課題に対応できる能力を持たないといけないということです。自ら問題を発見して、自分で考え、自分で判断して、自分で実行して問題を解決し、その結果にも責任を持つ、そんな人物像が望ましいと考えます。これが、「生きる力」のもとです。

4. 本園の保育の見直しの方向性

こんな問題意識のもとで、教育・保育も見直していかないといけないと考えています。本園でも従来、いわゆる設定保育を多く取り入れ、大人が決めたことができるようになるということを大きな目標として保育をする場面が多かったと思います。小学校にスムーズに進学できるということも目標としていました。この時期の子どもたちの吸収する力は大きく、指導したことを上手にできるようになるのも早いです。運動会できれいに合わせて演技ができる、発表会で上手にできる、素晴らしいとは思いますが、これは大人の視点で見えるところだけで評価していなかったのでしょうか？言われたことをやる子を育てていなかったのでしょうか。

「非認知的スキルの成長」は日々の生活の中で見られ、そうした晴れの舞台の中では見えにくいのではないのでしょうか。「一斉にできるようになる保育」の中では育ちにくいのではないのでしょうか？

では、どうすれば非認知的スキルは育つのでしょうか。

5. 子ども主体の保育への転換

子どもたちは、乳児であっても自分で成長しようとする力を持っています。自分がしたいという気持ちを大切に、忍耐を持って待つ必要があると思います。そうすることによって子どもたちが主体的に動ける生活習慣が身につくと考えます。

また、遊びについても与えられたものではなく興味関心をもった遊びに、自ら参加し遊び込む経験をする事で育っていくと考えられます。「遊び込む」経験をすることで子

どもたちの集中力が育っていくと考えられます。

この時期の子どもたちにとって、遊ぶことが学びです。子どもが主体的、対話的に、取り組み、「やり遂げた」という達成感・成功体験は、子どもの深い学び、発達につながります。興味関心を持ったことについては、子どもたちはすぐに吸収してできるようになります。どうしたらもっと面白いか考えます。そうした体験を積み重ねることによって、より子どもたちは成長します。

発達段階によるのですが、まず乳児の段階からもの(おもちゃ)に向き合う経験をします。最初は一人で遊べます。その後だんだん他の子どもを意識するようになり他の子と同じような遊びをします。一緒に遊んでいるようですが同じことをしているだけです。(並行遊びといえます)3才くらいまではそうです。

その後、一緒に関係性をもって遊ぶようになりますが、自己主張が強くぶつかることが多い段階です。(連合遊びといえます)ここでは、自分の思いと相手の思いが合わずによくぶつかることが起こります。相手にも思いがあって自己主張をするだけではうまく遊べないことに気づいて、自分の思いも抑えないといけないことに気づいていきます。

年長クラスぐらいになると、イメージを共有して、一つのを一緒に作っていくという遊びに発展していきます。(共同遊びといえます)ルールを守っているような遊びを行っていくこともできるようになります。ルールを守らないと面白くないということにも気づいていきます。そこでは規範意識の芽生えも出てきます。

6. 遊びの支援

自由遊びを大事にするということは、自由に遊ばせておいただけ、ということではありません。子どもたちだけで遊んでいる中でも遊びが発展していくこともあります。でもそれには限界があるので、保育者が適切に支援することが必要です。

子どもたちの自由遊び(Free play)の対極に大人が決めて大人が進めていくというのがあると思います。(一斉保育ではこのやり方が多いと思います。Directed instruction、or、Playful instruction といえます)

これらの中間にいくつかのバリエーションが考えられます。

大人がある程度学習目標を定め、大人がはじめたことを子どもたちが進めていく方法(Guided play、or、Games といえます)。子どもが始めたことを大人が進めていく方法(Co-opted play)、などがあります。

(相手の思いに気づき折り合いをつける
例)



砂場での道路作り→「カーズ」のレース場作り 「先生一緒にやろう」と誘いにくいる A が同じ場にいる相手に対して、指示すると BC らはそれを受け入れて動いている。A の指示に対して、BC らも従うだけでなく、相手の了解を得ながら独自の動きも出している。A の「カーズ」のイメージは相手も理解しているが、それぞれに独自の動きが出せている。ゴールを A、B それぞれが別の場所に作っている B「ゴール！」 A「え？そっちゴールちゃうで、こっちやで」 B のゴールは横線 A のゴールは、スコップをゴール看板に見立てて差している。保育者「なるほど、ゴールの旗ね」。B の近くにいた C が相談しようと提案 C「どっちかをスタートにすれば？」 A のこっちがゴールと決めているような動きを見た B が、自分のをスタートにするのもよいと思っ たのか「こっちスタートにする」と言って、スタートラインを書き直した

7. 保育の重点の見直し

乳幼児期の子どもたちにとって遊びは大切な学びの機会です。本園では遊びを中心に、より良い教育・保育を目指していきたいと考えております。

そのなかで来年度の行事についても見直しを行っていきたいと考えています。年間にたくさんの行事があると、それをこなすことが保育者の仕事になっていたのではないかと、それを無事終える事が目標になっていたのではないかと反省です。行事は子どもたちの大切な成長の機会です。でも、その行事によってそれぞれの子どもたちのどんな能力の成長を目標とし、狙い通りに成長したのかなど、その達成度を評価するという余裕もなしに次の行事に向かっていくということが多かったとの反省があります。

一つ一つの行事の狙いを再検討し、子どもたちの成長を丁寧に見ていく、そしてそれを保護者の皆さんにも発信していく、お知らせしていくというところに重点を置きたいと考えています。

8. 遊びの環境整備

遊びを中心とした保育を実現していくための環境整備として、園舎の建て替えを検討しています。十分に遊び込める環境を作っていこうとするときに、現園舎では限界があることから、それを改善するための取り組みです。今後整備の進捗に合わせ説明する機会を設けていきたいと考えています。

ご家庭と連携を深め、意見交換もしながら、子どもたちの育ちを大切にした教育・保育をすすめていきたいと考えています。ご理解と、ご協力をお願いします。

説明会を開催して直接お話する機会を設ける予定でしたが、国から緊急事態宣言が出される中、それも難しいことから、書面でのご説明とさせていただきましたが、ご意見、ご質問があれば、お応えいたしますので、メール、書面等でお知らせください。